

タイ北部山間部における環境問題への住民による対処行動と外部者の役割

酒井 泰広

キーワード：環境配慮行動、共進化、モン族、焼畑、森林劣化、森林管理、土壌劣化、果樹栽培、外部者、研究普及活動

1. 問題意識

焼畑可能な土地の縮小、焼畑人口の増加に伴い、持続可能性を失った環境破壊的な焼畑が世界各国で見られる。そして、破壊的な焼畑による森林、土壌の劣化はまず焼畑に頼って暮らす人々自身に襲いかかる。裕福とは言えない生活の中で、環境問題の直接的な加害者となり同時に被害者となっている焼畑農民自身はこうした状況をどのように捉え、認識し、行動しているのだろうか。そして、このような環境問題の解決を望むよそ者（外部者）はどのような役割を演じるべきなのだろうか。

2. 研究内容

本論文はタイ北部の山間地に位置する R 村の事例研究である。R 村の周辺地域では戦争難民のモン族が大量移住し人口が急増した結果、焼畑によって森林劣化、土壌劣化などの問題が発生している。

しかし、近年コミュニティによる森林保全管理、個人による果樹栽培といった新しい行動が見られるようになった。こうした活動は環境劣化への対処行動と言えるのだろうか。またどのような要因がこうした行動を規定しているのだろうか。村人へアンケート、インタビューなどの調査を行い、それに基づいて統計学などを用いた分析を行った。

3. 分析結果

森林保全管理活動の規定要因としては、管理ルールの成立段階では NGO や政府森林局の働きかけなどのきっかけが、その実効化段階では村人多数の森林保全への行動意図がそれぞれ挙げられる。

果樹栽培の行動規定要因としては、土壌劣化への目標意図（焼畑への依存を減らして行きたい度合い）と実行可能性評価（資金力、時間、技術に関する自己評価）が導出された。NGO や農業普及局による果樹栽培の普及活動は村人の目標意図への働きかけは有意であったが、実行可能性評価への影響は見られず、課題が残された。

一方で、フィールドワークから果樹栽培が R 村の住民に浸透していく過程で、樹種の選択において、村人自身による試行錯誤が繰り返されてきたことや、他にも村人自身による有機肥料や無農薬野菜栽培などの実践的な研究活動が見られた。

4. 考察

果樹栽培の行動規定要因として土壌劣化問題への目標意図が挙げられ、森林管理は水資源の保全を第一の目的に行われており、これらは環境問題への対処行動と呼べる。また、どちらの行動においても目標意図・行動意図と実際の行動は一对一の関係には無く、意識と行動の間にギャップが生じやすいことが示された。

また、R 村の人々の生活・生業の変化をたどると、貧困と環境破壊の板ばさみの中でも生業をより持続可能なものに変化させてきており、伝統的に焼畑を営んできた山岳民族においても、人間活動と自然環境の相互作用により、人間活動の持続可能性が高まっていく「共進化（Co-evolution）」が見られることが示された。

外部者の活動には課題が残された一方、村人自身による研究普及活動はこれまで外部者には軽視されてきたが、問題設定の的確さや地域適合性の高さなどの点において外部者の活動を凌駕しており、外部者は村人の研究普及活動に参加し、支援することで自身の課題を解決し、より効率的な活動が展開できるのではないかと思われる。